第Ⅱ部　トルコの都市下層民と社会意識

第1章

トルコ都市調査の概要と基礎データ

第1節　調査の概要

1．調査都市の概要

1985年と86年にトルコの6都市（後述），12調査地区において質問表による社会調査を実施した。

調査都市は，中央からの開発主義などが地方に浸透していくとき，地方都市の規模（大都市から町まで）やあるいは地方都市の地域性（地中海地域，黒海地域，中央アナトリア地域）にとって，どのような特徴的な反応がなされるかを検討するために，アンカラの他に五つの地方都市を選択した。また，調査の関心が都市下層民，とくにアンカラの不法占拠地域に住む都市下層民の形成とアンカラの都市下層民の送り出し地域との結び付きを検討することもあるため，地方の調査都市アンカラへ多くの移動者を送り出している地域の都市，具体的にはアンカラ以東に位置する都市に限定した。

また，一つの都市においても，都市の中心地近くに位置する中心地区とそうでない郊外地区の二つを選択した。同一の都市に位置し開発主義など中央からの浸透が等しいはずの同一の地方都市の2地区，すなわち都市の中心地区と郊外地区の間の反応に，なんらかの相違が認められるかどうか，また，認められるとしたらその理由は何かを考えることができるようにするためで

ある。

12の調査地域として，都市下層民が住むはずの不法占拠地区を選択し，不法占拠地区が存在しないか，わずかにしか存在しない地方小都市や地方町においては貧困地区といわれている地区を選択した。選択の基準は不法占拠地区とし，該当しないときには貧困地区の選択を，トルコ統計局の専門家に依頼した。統計局の専門家がそうした判断を下せないときには，調査地域の州，あるいは，市当局の専門家の助言を得た。また，調査地区においては地区台帳から無差別のサンプリングをトルコ統計局の専門家に依頼して，回答者（世帯主）を選定した。回答者が不在などの理由により回答不可能なときのために二人の補助回答者を選定しておいた。

〔調査都市の概要〕

調査した都市は中央アナトリア地域の首都アンカラ（人口223万5000人，1985年，以下同じ），地中海地域の大都市ガジアンテップ（47万9000人，アンカラの南東690キロ）と地中海地域の中大都市メルシン（31万4000人，アンカラの南東760キロ），また，農村からの流出の著しい黒海地域の中都市トラブゾン（14万2000人，アンカラから北東760キロ），アンカラと同じ中央アナトリア地域の小都市ネブシェヒル（5万人，アンカラの東270キロ），さらに，中央アナトリアの地方町ビュンヤン（1万3300人，アンカラの東350キロ，ネブシェヒルの北東に位置する），以上の6都市である。

調査6都市の規模順位をみれば，首都アンカラは第2位都市（1位はイスタンブル），大都市ガジアンテップは第6位都市，中大都市メルシンは第10位都市，中都市トラブゾンは第27位都市，小都市ネブシェヒルは第79位都市，地方町ビュンヤンは第277位都市である。

調査都市を，人口増加率を中心にした特徴から整理する。

(イ) 首都アンカラは，人口増加率が都市化の第1期（1956～65年）と第2期（66～75年）には6都市の中で著しく高かった（7.22%，6.51%）。しかしながら，第3期（76～85年）には著しく低下し（2.77%），全国都市の平均人口増加率（4.76%）を大幅に下回った。こうした点から，アンカラは「飽和した

新たな首都」といえよう。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップは，人口増加率が第1期から第3期まで安定的に高く，第2期にとくに高くなった（6.51%）。ただし，第3期には全国都市の平均増加率と同じ水準であった（4.75%）。シルクロード沿いの伝統的な都市ガジアンテップは，伝統的な工業を有する「繁栄する（伝統的）工業大都市」といえよう。

(ハ)　中大都市メルシンは，人口増加率が第1期，第2期ともに5％代であり（5.64%，5.79%），アンカラ，ガジアンテップに比較して低かった。しかし，第3期になると著しく高くなった。（7.52%），地中海に面したメルシンはイラクからの石油パイプラインの取り出し口となっており，石油精製など近代的な工業都市としての急激な成長が開始された。80年以降の新体制においても経済自由化の一翼を担って四つの自由貿易地域の一つに選定された。メルシンは，「新興工業中大都市」といえよう。

(ニ)　中都市トラブゾンは，人口増加率が第1期から第3期まで一貫して低く（4.52%，4.02%，3.86%），しかも，時期を経るごとに人口増加率は低くなっている。トラブゾンは，古くは農村人口増加率がマイナスの州が黒海地域15州のうち9州を占めたように，人口流出地域である黒海地域に位置する。また，古くはローマの時代にオーガスタス（BC 63－AD 14）東方遠征の時の宿場として重要性を増し（第Ⅱ部第3章参照），19世紀後半においては，西欧工業との緊密な結び付きによって東部アナトリア地域との通商で最も重要な港と考えられた。このようにトラブゾンは，「停滞する伝統的中都市」といえよう。

(ホ)　小都市ネブシェヒルは，人口増加率が第1期と第2期には著しく低く，発展とは無縁であった（2.32%，3.64%）。小都市グループ中でも，ネブシェヒルの人口増加率は低かった。しかし，第3期には，人口増加率は5％代に急増した（5.21%）。第3期に小都市の平均人口増加率（4.10%）を上回り，第1期，第2期の小都市のなかでも停滞的であった都市から，第3期に「発展を開始した小都市」となった。ネブシェヒルから車で30分ほどの所に，

竹の子形や松茸形の奇岩で有名な観光地ギョレメがあり，観光地への通過地として近年発展を開始した。ネブシェヒルは，「発展を開始した小都市」といえよう。

(ヘ) 地方町ビュンヤンは，人口増加率が第1期と第2期には3％代であり，(3.18%，3.79%)，小都市ネブシェヒルよりも高かった。しかし，第3期には著しく低下して1％未満になった（0.78%)。ビュンヤンはカーペットの生産地として有名であり，また，織り物を利用して国営の織物工場が存在する。この特産品をもち雇用機会の点でも他の町が有していない利点を，ビュンヤンは手にしている。この有利さにもかかわらず，第3期には人口の増加は著しく停滞した。ビュンヤンは，「豊かな停滞型の町」ということができよう。

2．調査地区の概要（位置と人口数）

(イ) アンカラの東北部のチャルスカンラル地区（Çhaliskanlar，地区の簡単な歴史は，第Ⅱ部第3章参照）では住民数9540人のうち75家計，0.79%である（第Ⅱ－1表参照。なお，アンカラ市の家計平均家族員数人で割れば，地区家計数の3.9％を占める。以下同様)。

(ロ) ガジアンテップでは，中心地ドュズテッペ地区（Düztepe，中心の市庁地区から南南西，約1.2～3キロに位置する，以下中心地区と略）で住民数8170人のうち40家計，0.49%，郊外地区ドュルックババ地区（Dürükbaba，市庁地区から西北に約2キロに位置し，鉄道と幹線道路で旧市地区と区切られた新興地域，以下郊外地区と略）では住民数8180人のうち30家計，0.21%（同1.05%）である。

(ハ) メルシンでは，東北部の準中心地シテラル地区（Siteler，市庁から北西，約4.5キロに位置する）では，住民数2万2360人のうち30家計，1.3％（同5.2％)，北部の郊外地区セルジュクラル地区（Seljuklar，市庁から北に6キロに位置する，以下セルジュク地区と略）では，住民数7150人のうち35家計，

0.49%（同2.45%），また，同じく西部の郊外地区デミルタシュ地区（Demirtash，市庁から北西，約4.5キロに位置する）では，住民数1万780人のうち35家計，0.32%（同1.6%）である。

(ニ) トラブゾンでは市の中心近くのザファール地区（Zafar，市庁から南西，約800メートルに位置する）では住民数2220人のうち30家計，1.35%，（同6.75%），市の中心近くのエセンテッペ地区（Esentepe，市庁から約700メートルに位置する）では住民数5440人のうち35家計，0.64%（同3.2%），郊外のバフチェジック地区（Bahçecik 市庁から南西1.2キロに位置する）では住民数5390人のうち35家計，0.65%（同3.25%）である。

(ホ) ネブシェヒルでは複数の調査地域を選出できなかったため，郊外の1地区350エブレル地区（350 Evler，州庁の北東ほぼ1キロに位置する）に限った。この地区は人口7370人であり，50家計，0.68%（同3.4%）である。

(ヘ) ビュンヤンでは中心地区スメル地区（Sumer，町役場から南南西に位置する，以下中心地区と略），郊外地区サールック地区（Saglik，町役場から北東に位置する，以下郊外地区と略）からそれぞれ25家計を選んだ。スメル地区の人口は現地での聞き取りでは500家計，1800～1900人であるから，1.39%（同約5%）である。

第2節　調査地区の概観

1．アンカラの郊外地区，チャルスカンラル地区

アンカラの中心地クズライから北東に約4.5キロに位置し，旧市で都市下層民が集中するアントュンダー地域（カレ地域の北部）の北東側にあって，地区からアンカラの中心部の高層ビルをみることができる。アンカラ郊外を西から取り囲むコンヤ街道，途中から市内に入ったところに長距離バスの発着場があり，コンヤ街道はさらに北に大きく曲線を描いて右に折れ，サムソ

ンの方に向かうサムソン道路の近くに，チャルスカンラル地区は位置する（第Ⅱ－3図参照，地図番号4後述）。この地区は1952年に成立し，65年には人口8700人，70年には1万5700人に増えたけれども，75年には地区が分割されたためか人口は9400人となり，85年でも人口は9300人である（現地資料）。

チャルスカンラル地区は，西の通りに近い方には斜面があり，斜面に2～3部屋ほどの家が存在している。雨の日はここがぬかるむ。しかし，斜面の上側には簡易舗装された道があり，その周辺には庭がある中程度の家が並んでいる。さらに進むと切り立った感じの斜面があり，夕方には暖房のためにスモッグがひどく，スモッグのひどいアンカラ市でもその程度は厳しい。なかには，斜面の端に半ば宙に浮くような形で家があり，家の暖房は木を燃やす釜土でとり，そこで豆などを煮て子供がパンを台から取り出して食べている。女主人がベッドに座って寒い部屋で縫物をしていた。また，別の家では老夫婦が住み，クズ拾いや運搬などをして生計をたて，この近くのいくつかの家には不法占拠地区成立当時に似て，板や丸太で塀を作った家もみられる。とはいえ，こうした家ばかりでなく，郊外の中間層向けの住宅も存在する。

2．ガジアンテップの中心地区と郊外地区

ガジアンテップの調査地域のうち，すでに述べられた中心地域に位置する中心地区，ドュズテッペ地区であり，郊外地域にあるものは市の北部，川を越えた新興の住宅郊外地区，ドュルックババ地区である（第Ⅱ－4図参照，地図番号17，54後述）。ドュズテッペ地区の市の中心から南南西に約1.2キロ行ったところである。中心地域とはいえ，町の中心からやや離れ，新興の住宅地域であるため道路は碁盤の目状に整備されている。しかし，未利用地が広がっている。この地区の中央部には，本業は穀物の卸商であるが，住宅の一部でピスタチオの卸商も営んでおり，地区の女たちにピスタチオを渡し

て，ピスタチオの殻を割らせて殻の割れたピスタチオを受け取る商人がいる。2階建ての建物の2階に住んでいる家では，階段を上がって入る部屋のドアには厚手の毛布だけしかなくて冷たい風が入って来る部屋で，女がピスタチオの殻を割っていた。この家族の夫は地区の別の女性の家に住み，そこではやや異なる雰囲気でこの男のもとに10名ほど男が集まり，別の部屋では女たちが集まって話し込んでいた。穀物の卸商が住む近くには広い内庭を備えた住宅があり，その近くの通りにはいくつかの商店がある。けれども，この穀物卸商から西に少し行けば，今でも不法占拠住宅と空き地が広がっている。

ドュルックババ地区は，市の中心から約2キロ（車で約5分）の南北に広がる地区である（以下郊外地区と略）。周囲には未利用の土地が広がり，広い感じの住宅が離れて存在するし，壁でかこまれた土のままの内庭では女たちが洗濯をしていた。また，比較的住宅が集まった地域の2階屋の屋上では11月の終わり頃に，家の女たちと娘，それに近くの親族の女が集まって粉を練り，丸めて広く薄くのばして，ピスタチオの殻を燃やした釜で冬用のパンを100枚ほど焼いていた。初冬の風物詩である。この地区は，周囲に空き地がある新興地域という特徴が顕著である。

3．メルシンの三つの調査地区

市の行政の中心地は，海岸沿いの大通り（イスメット）イノヌ大通りの中心部には広い前庭をもつ近代的に州庁がそびえ，この近くには高級なホテルや魚料理を出す高級レストランもある。この地区から2地区ほど北には主要な商業地域が広がる（第Ⅱ－5図参照，後述）。

中心の商業地域から東にジャマル・パシャ通りが延び，中心の商業地域を取り巻く形でのびる共和国大通りと東の方で交わり，この二つの通りが交差する地域にシテラル地区（第Ⅱ－5図参照，地図番号6）の南東の端が位置する。この南東の端にはマカロニ工場や小工場の集まる工場地域がある。シテ

ラル地区の中心部でも小さな町工場もあるし，地区の北で水路の近くには青物市場もある。東端には小さな川が流れている。シテラル地区は，郊外の地区ではあるけれども，以上のように一つのまとまりを形成しており，準中心地区であるといえる。この地区の住民には中心の商業地域で電気商を営む家族もいるし，南北に走る道の東側の道は舗装されて住宅は概して良い。ただし，南北に走る道の西側では，まだ庭に木が植えられた農村的な雰囲気の家も存在している。

中心の商業地区（8，18地区など）から北に進み，ケマル大通りに出てその大通りをシテラル地区の方に進み，途中で再び北に進んだ地域が，セルジュク地区（地図番号12）である。地区の西には水路が流れており，水路の川岸はコンクリートで舗装されている。この地区は郊外の農村地区という感じが強いが，地区の南部は，東西の道が並行に作られた住宅地域である。しかし，畑によって区切られ歩いて5分ほどかかる北部は，以前の農村が都市化の進展によってセルジュク地区に組み込まれた感じの地域である。離れた北部地域では小さな野菜市場や茶屋など伝統的な商店街があり，村の中心地といった雰囲気が漂う。調査の対象となったのは南部の通りと畑によって区切られた北部の端の地域である。

中心の商業地区から北に進み，ケマル大通りに出て西に進みその大通りが大きく曲がった地域の北に，デミルタシュ地区（地図番号25）が広がる。デミルタシュ地区のほぼ中央には南北に直線の通りが走り，それに交差する形で何本もの通りが東西に延びている。デミルタシュ地区は郊外の住宅地域である。ただし，この地区の土地が赤身を帯び，緑もいまひとつ少ない。地区内には商店や手工業店もあるけれども，地区の感じはやや厳しい生活状況を感じさせる。とくに大通りの舗装されていない部分や道や周辺の赤茶けた土が，この地区で印象的であった。

4．トラブゾンの三つの調査地区

トラブゾンの町は，古くからの港町であり，現在では停滞的に商業都市である。市の北都には黒海が広がっており，西側は港になっている。税関もこの港の先にある。

ザファール地区（第Ⅱ－6図参照，地図番号26）は，市庁と市の中心にある市広場の南西約800メートルに位置する中心地区である。市広場から西に商業地域を進み，タバクハーン橋を渡って約10メートルほどで川底に降りる。この橋の下に流れるコンクリートの蓋が掛けられた小さな川があり，その一番奥まった場所にある。この川底の通りの西側にはすぐオルタ・ヒサール（城・後述，地図番号20）の壁が切り立ち，この高い城壁の3分の1までは中腹やあるいは階段を上がったところにもこの地区の家が広がる。細い階段状の道を登るとこうした家に着く。この地区では住宅が密集し，古びた狭い感じがする。一番奥まったところには茶屋があり，地区の男たちや青年がここにきて，夜遅くまでトランプなどギャンブルをして茶を飲む。この地区の地区長（ムフタール）が，茶屋の経営主であった。

エセンテッペ地区（地図番号7）は，市の中心（市広場）から南東約700メートルに位置する。市広場から山の方へ南西に進みやや高くなった地区にある。この地区の中心通りは石畳で覆われ。2～3階建ての立派な住宅も並び店もある。ただし，地区の一部では中央通りから山の方へ狭い道が幾本も作られており，その両側には斜面を利用した3～4階建ての住宅が高密度に集まる。この地区の通りを東に5～10分ほど進むと，この道路と海の間に急な下り斜面があり，この急な斜面にも住宅が建設されている。歩いてきた本道から，道が直角に出て海の方に途中まで降りていく。海の方に下る一本の小道を利用して住宅が5～6軒集まり，別の海に下る道を利用する隣の住宅に行くときには，細い道を通る以外には，上の本道に戻ってもう一つ別の小道から行かなねばならない。斜面の下の海岸沿いには，主要幹線道路である海

岸大通りが走る。

バフチェジック地区（地図番号1）は，調査地ザファール地区の隣のオルタ・ヒサール地区（地図番号20）から約600メートル南に位置する。郊外に位置するこの地区には主道路が走り，その両側にはかなり大きな住宅が並ぶ。とくにこの地区の市の中心に近い方には小学校や高校などの教育施設が集まり，文教地区として発展し始めている。地区には商店もある。とくに中心からさらに南に登った地域では，果樹園なども広がりそれぞれの家にも木が植えられて，比較的広い庭のある郊外のやや農村風な家もある。しかし，新興住宅地として発展しているこの地区では，調査時にも建設中の住宅が目だった。この地区には未舗装の道路が多く，雨が降った後など道がぬかるみ生活環境はまだ整っていない点も多い。

5．ネブシェヒルの調査地区

350エブレル地区（第Ⅱ－7図参照，地図番号1）は1965年頃に建設され，他地域からここに不法占拠者たちが移されてきた，教員なども新興地に住むことになった。今日でも住民には教員や退職した教員も多い。この地区の通りは煉瓦状に石が敷き詰められており，庭のある家は少ないけれども，各家の部屋数は多く，住宅事情は良い。また，この地域の中心から離れた所ではブルドーザーで土地造成が進められている。3階建の住宅はこの地区の東南部に存在し，この地域の小高い丘のむこうに位置し，ギョレメへ行く道に近い地域の住宅には3～4階建ての住宅もある。新興の中上層の住宅地域の感じを与える。しかし，こうした高級住宅の所有者本人は国際移住労働者としてドイツなどに滞在してここには居住せず，賃借人を居住させる例もあった。

6．地方町ビュンヤンの中心地区と郊外地区

ビュンヤンは，アンカラの東350キロに位置し（カイセリの南），人口1万

3300人の町である。人口増加率は2～3％と低い町であるけれども，有名なカーペットの生産地で豊かな地域である。町の中央広場にはビュンヤン郡庁が置かれ，広場の西には国営カーペット工場（国営スメル銀行所有）がある。また，南の大通りの両側には大きな庭付きの家が並び，木の緑も多い。町の中心から東の方には橋が掛かり，郡庁のある地域よりも農村的な景観が広がる。この地域にある家は，大きくて庭も広く農村の家といった感じであり，隣と接していることはない。

市の南西部に広がる中心地区がスメル地区（第Ⅱ－8図参照，地図番号1）であり，郊外地区は橋を渡った先にあるサールック地区（地図番号5）である。サールック地区は以前の不法占拠地区に住んでいた人たちが，もとの居住地区が危険な環境になったため，この地区に移された地域である。サールック地区は一区画に50ほどの家（小さな内庭と2DKほど）であり，この区画に煉瓦状の石が敷き詰められた3本ほどの通りがある。町の中心からここに至る大通りの方にある家はすでに述べたように大きな農家と家が点在している。

第3節　家族員の構成

1．家族の成員数

調査対象者の家長の年齢は以下の通りである（家族員数は後述，第Ⅱ－3表参照）。

(イ)　首都では，家長の年齢は44.2歳であり，妻の年齢は39.0歳である。うち女性の家長は13.3％と多い。その理由は，死別・離別が8.0％，退職に伴う家長の交代が2.7％である。国際移住労働者としての流出によると推定できる女性の家長が2.7％を占める（夫と別居しており，夫は就業しているもの。この条件では必ずしも国際移住労働者として国外にいるとは確定できないけれども，妻（家長）の外国滞在経験や個別情報により十分に国際移住労働者の可能性は

高い。以下の記述はこの条件による)。なお，アンカラでは住民の 1.22% が外国に滞在している（アンカラ州の農村地域では 1.50%）[1]。

(ロ) 地方大都市ガジアンテップでは，家長の年齢は 42.2 歳（中心地区）と 42.8 歳（郊外地区）とアンカラよりも若い。また，女性の家長比率はそれぞれ 5.0%，10.0% である。国際移住労働者としての流出によるものは 5.0%，6.7%（他に，離別・死別 3.3%）である。なお，ガジアンテップでは住民の 1.25% が外国に滞在している（ガジアンテップ州の農村地域では，0.58% である)。

(ハ) 地方大中都市メルシンでは家長の年齢はさらに若くなり，40.4 歳，38.0 歳，37.8 歳となる。また，女性の家長比率は 2.9%，13.3%，8.6% と，最初のセルジュク地区を除く他 2 地区では地方大都市よりも高い。このうち国際移住労働者としての流出者としての流出によるものが第 2 のシテラル地区では 6.7% と高いが，他の 2 地区では存在しない。離別・死別によるものが 2.9%，6.6%，8.6% を占める。なお，メルシンでは住民の 1.05% が外国に滞在している（メルシンのあるイチェリ州の農村地域では，0.34% である)。

(ニ) 地方中都市トラブゾンでは，家長の年齢はメルシンよりも高くて，39.3 歳，41.5 歳，43.4 歳である。女性の家長比率は 20.0%，0%，5.7% となる。女性家長比率の最も高い中心地区のザファール地区では，国際移住労働者としての流出によるものが 6.7% を占め，死別・離別が 13.3% を占める。また，豊かなエセンテッペ地区では女性の家長は存在しない。最後のバフチェジック地区では国際移住労働者が 2.9% を占め，死別・離別も 2.9% を占める。

(ホ) 小都市ネブシェヒルでは，家長の年齢は 44.4 歳とアンカラ並であるが，女性の家長比率は 6.0% である。豊かなこの町では国際移住労働者は 2.0% と少ない（死別・離別 4.0%)。ただし，この地区のうち東の地域では既に述べたように (134 ページ参照)，国際移住労働者が所有する賃貸住宅がいくつか存在した。ネブシェヒルでは住民の 1.50% が外国に滞在している（ネ

ブシェヒル州の農村地域では，同比率は著しく高く3.42%である)。

(ヘ) 地方町では，家長の年齢はそれぞれ50.5歳と47.9歳であり，中心地区における方が高い。女性の家長比率はともに8.0%と少ない。カーペット織りで豊かなこの地方町では，国際移住労働者によるものは存在せず，郊外地区では4.0%（死別・離別4.0%）である。要約すると，第1に，アンカラでは家長の平均年齢は首都で44.2歳であり，小都市ネブシェヒル，地方町ビュンヤンではこれより高く，とくに地方町では高年齢である。これに対して，中都市トラブゾン，中大都市メルシンでは平均年齢は低く，とくに新興工業都市のメルシンでは低年齢である。地方大都市ガジアンテップでは首都よりやや低く，中都市や中大都市よりも高い。

第2に，中心地区の平均年齢を比較すれば，大都市ガジアンテップ，中大都市メルシンでは，相違は認められない。中都市トラブゾンでは平均年齢は郊外地区で中央地区よりも高いけれども，地方町ビュンヤンでは郊外地区で低くなる。

さらに，詳しく，それぞれの地区に関して非移動者と農村出身者と比較すれば，12地区のうち10地区においては非移動者の平均年齢は，農村出身者の平均年齢よりも低い（第II－3表参照)。例外的に高い地区は，地方大都市ガジアンテップの郊外地区（非移動者54.0歳，農村出身者42.1歳）と小都市ネブシェヒルの350エブレル地区（同46.2歳，44.4歳）である。10地区では，非移動者の多くが都市第二世代（移動者の子供）と想定すれば，都市第二世代の家長は農村出身の都市第一世代の家長よりも若いのである。なお，移動者の多かった新興工業都市メルシン（当該者のいないシテラル地区を除く）では，相違はみとめられない。

2．家族以外の親族員数

(イ) 首都アンカラでは平均家族員数は，5.1人である。家族員以外の親族が居住している比率（親族居住者家族の比率と略）は25.3%である。規模別に

みれば，1～3人家族は全家族の22.6％，4～5人家族が36.0％，6～7人家族が30.7％，8人以上の家族が10.6％である。

(ロ) 地方大都市ガジアンテップのうち中心地区でも郊外地区でも成員数は6.6人であり，家族の規模は首都よりも大きい。親族居住者家族の比率をみれば，中心地区では25.0％となり，郊外地区では20.0％と中心地区よりも低い。規模別にみれば，中心地区では1～3人家族は7.5％，郊外地区では3.3％と少ない。これに対して8人以上の家族は中心地区で37.5％であるのに対して，郊外地区で26.7％である。中心地区における方が郊外地区におけるよりも，小家族（1～3人家族）も多く，また大家族（8人以上）も多い。

(ハ) 地方中大都市で近代的工業都市メルシンにおいては，成員数は三つの地区で首都や地方大都市よりも大きく，それぞれ7.0人，6.8人，7.8人である。家族成員の最も大きいデミルタシュ地区では，親族居住者家族の比率は34.3％であり，他の2地区20.7％，26.6％よりも高い。

デミルタシュ地区では，1～3人家族は11.5％であり，他の2地区8.6％，26.7％の中間に位置する。しかし，8人以上の家族は31.5％と他の2地区の11.4％，10.0％と比較して圧倒的に高い。郊外地区デミルタシュ地区では，準中心地区シテラル地区よりも大家族（8人以上）の比率が高いが，地方大都市ガジアンテップの中心地区のようには大家族（8人以上）の比率は高くない。デミルタシュ地区の居住者はすでにみたように，東南部アナトリア地域（人種的にクルド人が住む）からの流入が多く，クルド人は都市へ流入してからも，出身地域における家族構造に似た大家族制を維持しているといえ，親族居住者も多い。

(ニ) トラブゾンでは，家族成員数は地方大都市ガジアンテップや新興工業都市の中大都市メルシンよりも少なく，首都アンカラ（5.1人）よりも少ない。中心地区ザファール地区では4.5人，豊かな中心地区エセンテッペ地区では4.7人であり，郊外のバフチェジック地区では5.0人と最も大きい。親族居住者家族の比率は23.3％，37.1％，14.3％である。中心地区にお

いて家族成員数は少ないけれども，親族居住者のいる家族は中心地区，なかでも富裕な中心地区エセンテッペ地区において最も多い。

規模別にみれば，中心地区ザファール地区と豊かなエセンテッペ地区では1～3人家族が26.7％，28.6％であり，郊外地区バフチェジック地区で20.6％と少ない。これに対して8人以上の家族は中心地区で13.3％，11.4％であり，郊外地区で8.8％と少ない。

1～3人の小家族にも親族居住者家族の比率が，他の地区に比較して高い(23.1％)。トラブゾンにおいても地方大都市ガジアンテップと同様に，中心地区において小家族（1～3人）が多く，同時に大家族（8人以上）が多い。

(ホ) 小都市ネブシェヒルでは，家族成員数は4.4人と調査地区12地区の中で最も少ない。親族居住者家族の比率も16.0％と，最も低いトラブゾンのバフチェジック地区に次いで低い。成員の規模をみれば，1～3人家族は20.0％であり，8人以上の大家族は4.0％に限られる。核家族を中心にした少人数の家族が多いといえよう。

(ヘ) 地方町ビュンヤンでは，中心地区では家族成員数は4.9人，郊外地区でも5.3人である。親族居住者家族の比率は地方町では高くて，中心地区では32.0％，郊外地区では最も高くて40.0％に及ぶ。中心地区でも，新興工業都市である中大都市メルシンのデミルタシュ地区（クルド出身者が多い）や中都市トラブゾンの豊かなエセンテッペ地区（中心地区）と並んで，高い比率を示す。しかし，地方町ではガジアンテップやトラブゾンと異なって，親族居住者のいる家族は中心地区ではなくて豊かな郊外地区に多い。親族居住者のいる家族が多いこともあり，成員数の規模も中都市トラブゾンや小都市ネブシェヒルよりも大きい。とくに，親族居住者のいる家族の多い郊外地区では成員数は大きい。

家族規模をみれば，1～3人家族が中心地区で16.0％，郊外地区で8.0％と他の都市地区に比較して少なく，8人以上の大家族も4.0％，8.0％と少ない。地方町では小家族（1～3人）も少ないけれども，大家族（8人以上）も少ないのである。

第4節　調査地区と出身地域

都市12調査地区の居住者の出身地域をみていこう。各調査地区における出身地域別の移動者実数は第Ⅱ－1表のように，計445人である。出身地別比率は，第Ⅱ－1表，および同表から作成した第Ⅱ－1図のとおりである。

(イ)　アンカラのチャルスカンラル地区では非移動者は12.0％，都市出身者は6.7％，地方町出身者は17.3％となり，農村出身者が64.0％を占める。なお，第Ⅱ－1図の非移動者の折れ線1と農村出身者折れ線2も，各地区における双方の比率の変化を示している。1980年のアンカラ調査[(2)]において，ニッサン，アクデレ，フザル，地区（第Ⅱ－3図参照，地図番号1，5，6）では非移動者の比率が5～8％であったことに比較して（アユバリ地区は38.7％），チャルスカンラル地区では非移動者の比率は高い。

(ロ)　伝統的工業大都市ガジアンテップでは，中心地区でも郊外地区でも非移動者はそれぞれ5.0％と3.3％であり，アンカラよりも低い。それだけ流入者が地方の伝統的工業大都市では多いといえよう。

地方大都市の中心地区では，郊外地区に比較して，すでにみたように非移動者の比率は高く，その他都市出身者の比率も高い（その他都市出身者7.5％，3.3％，町出身12.5％，6.7％）。逆に，農村出身者の比率は低くなる（75.0％，86.7％）。とはいえ，中心地区でも郊外地区でも，農村出身者の比率は，アンカラ地区を含め，他都市の調査地区のなかで最も高い（メルシンのシテラル地区77.1％を除く）。

(ハ)　新興工業中大都市メルシンでは，非移動者の比率（郊外地区セルジュク地区5.7％，準中心地区シテラル0％，郊外デミルタシュ地区2.9％）は，地方大都市のガジアンテップと同水準かそれ以下であり，首都アンカラよりも低い。首都よりも地方大都市や中大都市における貧困地区には，流入者が多い。農村出身者の比率は二つの郊外地区で68.6％，77.1％であり，後者デミルタシュ地区がより高い（アンカラとガジアンテップの中間に位置する）。これに対

して，準中心地区では63.3％と郊外地区よりやや低い。メルシンにおいても，準中心地区の方が郊外地区よりも農村出身者の比率が低い。

メルシンの三つの地区においては，郊外（農村風）地区セルジュク地区では非移動者，都市出身者，町出身者の比率が均等的に高い（5.7％，8.6％，17.1％）。西部の郊外地区デミルタシュ地区では，農村出身者が最も多い。これに対して，準中心地区シテラル地区では非移動者は存在せず，すでに述べたように農村出身者の比率は2地区よりも低い。逆に，地方町出身者の比率は30.0％を占め，他の2地区よりも圧倒的に高く，調査した12地区の中で最も高い（バフチェジック地区を除く）。準中心地区シテラル地区は，相対的に地方町の出身者が多い地区であるといえよう。

(ニ)　中都市トラブゾンでは，地方の大都市，中大都市に比較して，また，首都アンカラに比較して非移動者の比率が高い（中心地区のザファール地区20.0％，中心地区で最も富かなエセンテッペ地区11.4％，郊外のバフチェジック地区14.3％）。逆に，農村出身者の比率は最も高い中心ザファール地区（70.0％）を除けば，富裕な中心地区エセンテッペ地区（60.0％），郊外地区バフチェジック地区（48.6％）は，首都，地方の大都市，中大都市の各地区よりも低く，ザファール地区の高い農村出身者比率も，地方大都市や中大都市の各地区に比較すれば低い。黒海地域の停滞的な中都市は，農村出身者比率が中大都市以上の都市に比較すれば低い。

トラブゾンの三つの地区では，中心地区ザファール地区で最も農村出身者が多い（70.0％）。逆に，郊外地区バフチェジック地区で農村出身者が少なく（48.6％）。地方大都市や中大都市の郊外地区で農村出身者が多かったことと異なる。郊外地区バフチェジック地区では，とくに地方町出身者が多く（34.3％），出身地構成では中大都市メルシンの準中心地区シテラル地区に似る。また富裕なエセンテッペ地区は，二つの地区の中間的な構成比率を示す。

(ホ)　小都市ネブシェヒルでは，350エブレル地区は非移動者比率が高い（44.0％）。農村出身者比率も高いが（42.0％），地方町出身者比率は（2.0％）低く，むしろ，都市出身者比率が高い（12.0％）。ネブシェヒル（小都市）自

身を都市に含めて考えれば，この地区の住民の過半数（56.0％）は都市出身者であり，他の地区より住民は小都市的であるといえる。

(ヘ) 地方町ビュンヤン（カイセリ州）では，中心地区でも郊外地区でも非移動比率が著しく高い（中心地区，72.0％，郊外地区，52.0％）。流入者が少なく，とくに中心地区の方が流入者比率は著しく低い。それゆえ，農村出身者比率は中心地区で著しく低く（12.0％），郊外地区では高い（48.0％）。郊外地区の出身地構成は小都市に類似するけれども，都市出身者や町出身者が存在せず，小都市とは異なる特徴がある。ただし，中心地区には町出身者は存在している（16.0％）。

以上を要約すると，第1に，農村出身者は，首都（農村出身者比率64.0％）におけるよりも，伝統的工業を有し繁栄する地方大都市（同80.9％，地区ごとの平均，以下同じ）や新興工業を有する中大都市（69.7％）における方が多く，中都市（59.6％），小都市（42.6％），地方町（30.0％）の順で低下する。

第2に，農村出身者は，郊外地区における方が中心地区におけるよりも多い。この傾向は，比較可能な4都市のうち，地方大都市ガジアンテップ，中大都市メルシン，地方町ビュンヤンで該当し，停滞的な伝統的中都市トラブゾンでは該当しない。

第3に，都市出身者（移動者に限る）の最も多い地区は小都市の350エブレル地区である。また，町出身者（移動者に限る）の多い地区は，中大都市メルシンの準中心地区シテラル地区，中都市トラブゾンの豊かな中心地区エセンテッペ地区，同じ郊外地区バフチェジック地区，それに，地方町の中心地区である。町出身者は，中都市トラブゾンの郊外地区を例外として，中心地区における方が郊外地区におけるよりも多いといえ，この傾向は地方大都市ガジアンテップにおいても該当する。

第5節　調査地区の学歴構造

6都市の教育水準を文盲率（複数地区のある都市では，第Ⅱ－1表より算出した平均値）によってみるとすれば，教育水準は低い方から（すなわち，文盲率は高い準に）アンカラ（44.0％），地方大都市ガジアンテップ（41.3％），地方町ビュンヤン（18.0％）新興工業中大都市メルシン（16.1％），中都市トラブゾン（12.5％），小都市ネブシェヒル（4.0％）の順である。地区ごとの学歴構造については，第Ⅱ－1表と，同表から作成した第Ⅱ－1図（折れ線3～5）を参照していただきたい。

(イ)　アンカラのチャルスカンラル地区では，文盲層と小卒層が主要な学歴集団を占める。文盲層は37.3％であり，正規の学校には行かなかったけれども読み書き可能層（以下，読み書き可能層）は5.3％である。小卒層は44.0％であり，中卒層，高卒層はそれぞれ4.0％である。大卒である高等教育層は2.7％を占める。首都アンカラのチャルスカンラル地区は，高卒と高等教育層を備えた「小卒多・文盲層副（ただし双軸）型」の学歴構造をとる。（なお，以下で「主」を用いるときは50％以上，「多」は40～50％，「副」は20～40％，「少」は20％以下，とくに「極少」は10％以下とする）。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップでは，中心地区はアンカラよりも教育水準は高いが（文盲率に限定すれば32.5％，アンカラ37.3％），郊外地区では教育水準は低い（文盲率43.3％）。中心地区では，文盲層以外では読み書き可能層がやや多く（7.5％），これに対して，小卒層はアンカラより多く，文盲層を大幅に上回る（52.5％）。また，高卒層（2.5％）や高等教育層（2.5％）も，アンカラより少ないけれども存在する。中心地区は，高等教育も備えた「小卒主・文盲層副型」の学歴構造をとる。

郊外地区では，文盲層はアンカラより多く（43.3％），とくに読み書き可能層が他地区に比較して圧倒的に多い（23.3％），これに対して，小卒層はアンカラよりも少ない（30.0％）。高卒層は存在するが（3.3％），高等教育層は存

在しない。郊外地区の学歴構造は，中心地区の学歴構造と大いに異なる。すなわち，郊外地区は，高等教育層を欠いて読み書き可能層の多い，「小卒副・文盲層多型」の学歴構造をとる。

(ハ) 新興工業中大都市メルシンでは，3地区ともアンカラより著しく教育水準が高い（文盲率に限定すれば，8.6％，16.7％，22.9％）。郊外（農村風）地区セルジュク地区では，文盲層がアンカラより著しく少なく，また，メルシンの3地区の中でも最も少ない（8.6％）。これに対して小卒層はアンカラよりも多く，文盲層を圧倒する（54.3％）。高卒層もアンカラの2倍と多く（8.0％），高校中退も多い（8.6％）。ただし，高等教育層は存在しない。セルジュク地区は，メルシンで最も多く高卒層を有するが，高等教育層を欠く，「小卒主・文盲層極少型」の学歴構造をとる。

準郊外地区シテラル地区は，文盲層は少ないけれども，セルジュク地区よりは多く（16.7％），読み書き可能層は少ない（3.3％）。これに対して小卒層は，アンカラはもちろんセルジュク地区よりも多い（56.7％）。高卒層はアンカラより多いけれども，メルシンの3地区の中では最も少ないし（6.7％），高等教育層は存在しない。準郊外地区シテラル地区は，メルシンで最も少しの高卒層を有するだけであり，高等教育層を欠く，「小卒主・文盲層少型」の学歴層構造をとる。

東南部地域からの拡大の流入者の多いデミルタシュ地区では，文盲層はメルシン3地区でも最も多く（22.9％），読み書き可能層も多い（8.6％）。これに対して小卒層は，メルシンで最も少なくアンカラに近い（48.6％）。ただし，高卒層はメルシンで第2位でアンカラの2倍あり（8.6％）。高等教育層は存在しない。東南部からの流入者の多いデミルタシュ地区は，高等教育層を欠く，「小卒多・文盲層副型」の学歴構造をとる。

(ニ) 中都市トラブゾンでは，3地区ともアンカラよりも教育水準が高く，また，文盲層の少なさからすれば，メルシンよりも教育水準が高い（23.3％，5.7％，8.6％）。中心地区ザファール地区では，文盲層はトラブゾンで最も多く，アンカラよりも少ないけれども，メルシンの最も多いデミルタシュ地区

とほぼ同じである（23.3％）。ただし，読み書き可能層はほぼアンカラ並である（6.7％）。これに対して小卒層は12地区の中で最も多い（60.0％）。しかし，高卒層はアンカラ以下であり（3.3％），高等教育層は存在しない。中心地区ザファール地区は，アンカラ以下の高卒層しか有せず，高等教育層を欠く，「小卒主・文盲層副型」の学歴構造をとる。

豊かな中心地区エセンテッペ地区では，文盲層は極めて少なく（5.7％），読み書き可能層は多い（14.3％）。これに対して小卒層はほぼアンカラ並であり（45.7％），高卒層はアンカラより3倍多く（11.4％），高等教育層もアンカラより多い（5.7％）。豊かな中心地区エセンテッペ地区は，アンカラを上回る高卒層と高等教育層を有する，「小卒多・文盲層極少型」の学歴構造をとる。

郊外地区バフチェジック地区では，エセンテッペ地区よりも文盲層は多く（8.6％），読み書き可能層は少ない（11.4％）。これに対して，小卒層はやや多い（51.4％）。高卒層はエセンテッペ地区と同じであるが（11.4％），高等教育層は同地区より多い（8.6％）。郊外地区バフチェジック地区は，エセンテッペ地区をさえ上回る高等教育層を有する，「小卒主・文盲層極少型」の学歴構造をとる。

(ホ)　小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では，教育水準はアンカラより圧倒的に高い（文盲率4.0％）。文盲層は12地区で最も少なく，読み書き可能層も少ない（6.0％）。小卒層もアンカラより少ない（38.0％）。これに対して，高卒層は12地区でもっとも多く（18.0％），高等教育層も最も多い（14.0％）。小都市ネブシェヒルの350エブレル地区は，12地区で最も多くの高卒層と高等教育層を有し，「小卒副・文盲層極少型」の最も高学歴な学歴構造をとる。

(ヘ)　地方都市ビュンヤンでは，中心地区でも郊外地区でもアンカラよりも教育水準は高いが，中心地区よりも郊外地区の方が高い（文盲率は逆にそれぞれ24.0％，12.0％）。中心地区では，文盲層はメルシンのデミルタシュ地区やトラブゾンのザファール地区と同水準であり（24.0％），小卒層はアンカラ

並である（48.0％）。高卒層はアンカラと同水準であり（4.0％），高等教育層はネブシェヒルに次ぎバフチェジック地区と同水準である（8.0％），地方町ビュンヤンの中心地区は，アンカラと同水準の高卒層を有するが，アンカラ以上に高等教育層を備えた，「小卒多・文盲層副型」の学歴構造をとる。

地方都市の豊かな郊外地区では，文盲層は中心地区よりも低い（12.0％），小卒層はメルシンの3地区と同水準で高い（56.0％）。高卒層と高等教育層はほぼアンカラと同水準である（4.0％，4.0％）。地方町ビュンヤンの郊外地区は，「小卒主・文盲層少型」の学歴構造をとる。

第6節　調査地区の家計収入

1．地区別の家計収入

各地区の家計収入と個人収入に関しても整理しておく。1985年に調査した(イ)アンカラと(ロ)ガジアンテップに関しては，収入に関するデータは存在しない。しかし，86年に調査した(ハ)メルシン，(ニ)トラブゾン，(ホ)ネブシェヒル，(ヘ)ビュンヤンに関しては家計収入と個人収入に関するデータが存在する（第Ⅱ－2表参照）。

(イ)アンカラと(ロ)ガジアンテップの収入に関しては，借りるとしたら家賃はいくらかを聞いた想定家賃から，推定する以外に方法はない（後述）。

(ハ)　新興工業中大都市メルシンの3地区では，準中心地区シテラル地区の家計収入が9万5400リラで最も高い。二つの郊外地区は家計収入が低い。二つの郊外地区では，東南部からの流入者が多いデミルタシュ地区7万9500リラ，最も低い地区が郊外（農村風）地区セルジュク地区7万2700リラである。この家計収入の順位は，個人収入の順位と同じである（第Ⅱ－2表，および同表から作成した第Ⅱ－2図参照）。

(ニ)　中都市トラブゾンの3地区では，中心地区エセンテッペ地区の家計収

入が10万6800リラで最も高く，9地区のうちでも最も高い。次いで中心地区ザファール地区8万8300リラであり，二つの中心地区で高い。これに対して，郊外地区バフチェジック地区では7万3400リラと低い。家計収入の順位は，個人収入の順位と同じである。

(ホ)　小都市ネブシェヒルの350エブレル地区も家計収入は9万6700リラであり，トラブゾンの豊かなエセンテッペ地区に次いで高い。

(ヘ)　地方町ビュンヤンの2地区では，郊外地区の家計収入が8万3800リラと高く，これに対して中心地区6万9800リラと低いし，9地区のうちでも最も低い。ビュンヤンでは，中心地区ではなく郊外地区で家計収入が高い。また，家計収入の順は，個人収入の順位と同じである。

すべての調査地区に存在する想定家賃と実際の家賃から，地区の経済状況を知ることができる。想定家賃とは自宅所有者やその他所有者（両親の所有などで家賃を支払わなくともよい層）に，自宅をもし借りるとしたらいくらぐらいかを聞いた額である。実際に家賃を支払う借家居住者の数より自宅所有者の数が多いため，実際家賃よりも想定家賃によって地区の経済状況を検討する。

(イ)　アンカラのチャルスカンラル地区では，想定家賃は1万5400リラである（実際の家賃は9900リラ，第II－2表参照）。86年に調査した4都市と比較するために，アンカラの存在に中央アナトリア地域の年間インフレ率45.1％[3]で仮に換算すると，2万400リラとなる。従来からの賃借者にそのままインフレ率と同じだけ家賃が上昇しないために，やや高めと思われるこの概算額でも，新興工業都市メルシンの3地区（後述）や中都市トラブゾン2地区（後述），豊かな小都市ネブシェヒル（後述）よりも低く。アンカラのチャルスカンラル地区の経済状況を推測することができる。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップでは，想定家賃が中心地区で1万7200リラであり，郊外地区の1万2600リラよりも大幅に高い。中心地区が経済的にそれだけ恵まれているためでもあるといえよう。中心地区はアンカラの想定家賃より高い。ここでもガジアンテップが存在する地中海地域のインフレ率

45.7％で仮に換算すると，中心地区2万5100リラ，郊外地区1万8400リラとなる。中心地区の想定家賃は，メルシンやトラブゾンにおいてそれぞれ想定家賃が2番目に高いデミルタシュ地区，バフチェジック地区に近い。郊外地区の想定家賃は地方町の2地区を除いたどの地区よりも低く，郊外地区の厳しい経済状況を推測することができる。

(ハ) 新興工業都市メルシンでは，3地区の想定家賃の平均は2万5100リラであり，中都市トラブゾンの2万4900リラとほとんど変わらない。ただし，支払っている実際の家賃の平均は2万1200リラであり，トラブルゾンの1万5200リラよりも大いに高い。新興工業都市メルシンの家賃は，密集度の高い伝統的中都市トラブゾンよりも高い。

メルシンの3地区では，想定家賃が郊外（農村風）地区セルジュク地区で最も高くて2万7000リラであり，東南部地域からの流入者が多いデミルタシュ地区でも2万4900リラと高い。これに対して準中心地区は2万3500リラと低い。実際の家賃ではデミルタシュ地区が最も高く（2万2500リラ），郊外（農村風）地区セルジュク地区（2万1600リラ）であり，準中心地区シテラル地区が最も低い（1万9500リラ）。

(ニ) 中都市トラブゾンでは，想定家賃が3地区のうち豊かな中心地区エセンテッペ地区で最も高い2万7800リラであり，学歴の高い（後述）郊外地区バフチェジック地区でも2万6600リラと高い。これに対して中心地区のザファール地区は低くて2万300リラである。しかし，実際の家賃ではわずかながら郊外地区が最も高く（1万6300リラ，エセンテッペ地区1万6200リラ），中心地区ザファール地区が最も低い（1万3000リラ）。

(ホ) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では，家計収入は豊かなエセンテッペ地区に次いで第2位であるけれども，想定家賃は3万1500リラと9地区の中で最も高い。また，実際の家賃も2万5000リラと9地区の中で最も高い。

(ヘ) 地方町ビュンヤンでは，中心地区も郊外地区の想定家賃は他の都市に比較すれば，大いに低い。9地区の中で家計収入の最も低い中心地区で想定

家賃が1万3000リラであり，豊かな郊外地区では1万4900リラと中心地区よりも高い。しかし，実際の家賃では中心地区が1万2000リラであり，郊外地区の1万500リラより高い。家計所得の低い中心地区における賃借居住者は家計収入の高い効外地区の賃借居住者よりも高い家賃を支払わざるをえない。

2．出身地別集団と家計収入

各集団の家計収入を，出身地別と学歴別にみておこう。

アンカラとガジアンテップに関しては家計収入に関するデータがないので想定家賃や実際の家賃から，非移動者と農村出身者を中心に各集団の経済事情を推定する（第Ⅱ－2表参照）。

(イ)　アンカラでは，想定家賃は非移動者（1万6300リラ）と都市出身者や町出身者では変わらないけれども，農村出身者は低い（1万4800リラ）。また，実際の家賃では，町出身者は高く（1万7000リラ），非移動者と農村者は低い（8000リラ，9100リラ）。この二つのデータからすれば，農村出身者の経済事情が最も劣ると推定できる。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップでは，中心地区において想定家賃は非移動者（8000リラ）よりも農村出身者で高く（1万8200リラ），農村出身者の経済事情が劣るとはいえない。また，郊外地区では非移動者（1万3000リラ）と農村出身者（1万3100リラ）には，差がない。地方大都市では実際の家賃では比較可能なデータはないが，想定家賃から判断する限り，農村出身者に首都アンカラにみられるような劣った経済事情は認められない。

(ハ)　新興工業中大都市メルシンでは，家計収入に関するデータが存在する。家計収入は，郊外（農村風）地区セルジュクで非移動者（5万リラ）よりも農村出身者の方が高い（7万1000リラ）。ただし，農村出身者は都市出身者よりも家計収入は低い。また，東部地域からの流入者の多いデミルタシュ地区では，非移動者（8万リラ）よりも農村出身者（7万4500リラ）は低い。農

村出身者の家計収入は都市出身者や町出身者よりも低くて，農村出身者の経済事情は最も劣る。準中心地区シテラル地区では，非移動者は存在しないが，農村出身者の経済事情が最も劣るとはいえない。このように新興工業都市では，デミルタシュ地区のように農村出身者の経済事情が最も劣る例もみられるが，必ずしもそうとはいえない。

(ニ) 中都市トラブゾンでは，家計収入は二つの中心地区で非移動者（ザファール地区，6万9000リラ，エセンテッペ地区，9万1300リラ）よりも，農村出身者が相当高い（9万600リラ，11万4900リラ）。この二つの地区では，家計収入は町出身者が最も高く，農村出身者，非移動者，そして，都市出身者の順である。学歴構造の高かったバフチェジック地区では，家計収入は非移動者が著しく高く（13万6800リラ），農村出身者は低い（6万5900リラ）。

(ホ) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では，家計収入は非移動者（9万900リラ）と農村出身者（9万1000リラ）で同じである。しかし，都市出身者（11万2200リラ）や町出身者（21万リラ）に比較し，非移動者と農村出身者の経済事情がともに劣る。

(ヘ) 地方町ビュンヤンでは，家計収入は，中心地区でも郊外地区でも非移動者（6万8200リラ，8万9400リラ）よりも農村出身者が低い（6万1700リラ，7万7700リラ）。農村出身者の経済事情は劣ると，地方町の二つの地区でいえる。

要約すると，a）農村出身者が非移動者よりも劣った経済事情を強いられる地方は5地区である。すなわち，アンカラ（想定家賃による），新興工業都市メルシンの東南部地域からの流入者の多い郊外地区デミルタシュ地区，中都市トラブゾン郊外地区のバフチェジック地区，それに小都市の中心地区と郊外地区である。b）農村出身者が非移動者と同じような経済事情にある地区は2地区である。地方大都市ガジアンテップの郊外地区（想定家賃による）と小都市ネブシェヒルの350エブレル地区である。これに対して，c）農村出身者が非移動者よりも良い経済事情にある地区は4地区である。地方大都市ガジアンテップの中心地区，メルシンの郊外（農村風）地区セルジュク地区，ト

ラブゾンの二つの中心地区である。d）比較するにはデータが不足する地区はメルシンの準中心地区シテラル地区である。

流入の時期や職業によって，もちろん家計収入は異なるけれども，データの存在する9地区のうち半分以上の5地区（その4地区は郊外地区，アンカラを含める）では，農村出身者が劣った経済事情を強いられている。逆に，地方都市の中心地区では，もし農村出身者が中心に流入できたとすれば，必ずしも農村出身者も劣った経済事情を強いられているわけではない。地方町では，中心地区でも郊外地区でも農村出身者の経済条件は劣るといえそうである。

3．学歴集団と家計収入

学歴別にみていこう。

(イ)　アンカラでは，想定家賃は，文盲層（1万3800リラ）が，小卒層（1万5100リラ）よりも低い。実際の家賃でもこのことは該当する（8800リラ，9900リラ，第Ⅱ－2表参照）。高卒層（1万7300リラ），高等教育層（3万2500リラ）は，想定家賃の高い小卒層よりも高く，学歴に準じて想定家賃が上昇する（学歴は，この4種類に限定して述べる）。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップでは，想定家賃は必ずしも文盲層で最も低くはない。中心地区で文盲層（2万2500リラ，実際の家賃2万100リラ）は小卒層（1万3400リラ，実際の家賃1万500リラ）の倍近くあり，四つの学歴集団の中で最も高い。高卒層（1万5000リラ）と高等教育層（2万リラ）は，低い方の小卒層よりも高く，しかも高等教育層より想定家賃は高い。また，郊外地区においては，文盲層（1万1100リラ，実際の家賃6000リラ）は小卒層（1万4300リラ，実際の家賃6000リラ）よりも低い。ただし，高卒層（1万リラ）は低い方の文盲層よりも低い。

(ハ)　新興工業都市メルシンでは，家計収入に関するデータが存在する。郊外（農村風）地区セルジュク地区では，家計収入は文盲層（8万リラ）が小卒層（6万7600リラ）より高い。高卒層（6万9500リラ）は低い方の小卒層とほ

ぼ同じ水準である。準中心地区シテラル地区では，文盲層は著しく低く（5万5800リラ），小卒層（10万8800リラ）の半分ほどである。高卒層（6万5000リラ）は，低い方の文盲層よりやや高い程度にとどまる。東南部地域からの流入者の多いデミルタシュ地区では，文盲層（8万リラ）は地区平均（7万9500リラ）とほぼ水準であり，小卒層（7万8300リラ）よりもわずかに高い。高卒層（12万3000リラ）は，最も高い家計収入を得ている。

(ニ) 中都市トラブゾンでは，家計収入は中心地区ザファール地区で文盲層（7万5700リラ）が，小卒層（8万1600）より低い。高卒層（8万リラ）は高い方の小卒層よりやや低い。ザファール地区では学歴による家計収入に大きな格差は認められない（高校中退者を除く）。豊かな中心地区エセンテッペ地区では，家計収入は文盲層（9万9000リラ）が小卒層（9万3400リラ）よりも高い。また，高卒層（11万リラ）と高等教育層（10万リラ）は，高い方の文盲層よりやや高い。高学歴の郊外地区バフチェジック地区では，文盲層（6万1700リラ）は小卒層（7万1800リラ）より低い。高卒層（6万9800リラ）と高等教育層（8万3700リラ）は，高卒層が高い方の小卒層より低いが，高等教育層は小卒層よりさらに高い。

(ホ) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では，家計収入は文盲層（9万7000リラ）が小卒層（8万2300リラ）より高い。しかし，高卒層（12万3600リラ）と高等教育層（11万9300リラ）は，文盲層，小卒層のいずれよりも著しく高い。学歴と家計収入をみれば，学歴の高い方が家計収入が多いのである。

(ヘ) 地方町ビュンヤンでは，家計収入は中心地区で文盲層（6万7700リラ）が小卒層（6万1200リラ）より高い。高卒層（5万5000リラ）は最も低い。高等教育層はこの地区では著しく高い（10万7500リラ）。他方，豊かな郊外地区では，家計収入は文盲層（6万1700リラ）が小卒層（10万3200リラ）の約6割の家計収入しか得ていない。高卒（3万5000リラ）は著しく低いが，この地方町の中心地区でも高等教育層（11万リラ）が高い収入を得ている。

要約すると，a) 文盲層が小卒層より収入の低い地区は6地区である。アンカラ，地方大都市ガジアンテップの郊外地区（ともに想定家賃による），新興工

業都市メルシンの準中心地区シテラル地区，中都市トラブゾンの中心地区ザファール地区と郊外地区バフチェジック地区，地方町ビュンヤンの郊外地区である。b）文盲層が小卒層より収入の高い地区も6地区である。ガジアンテップの中心地区（想定家賃による），メルシンの二つの郊外地区，セルジュク地区とデミルタシュ地区，トラブゾンの豊かな中心地区エセンテッペ地区，ネブシェヒルの350エブレル地区，地方町ビュンヤンの中心地区である。必ずしも文盲層が小卒層よりも低収入であるとはいえない。

滞在期間，年齢，職業などの要因が収入に関わるけれども，文盲層が早期に都市に流入し，それゆえ都市の中心地区に流入することができ，主要な職業につけたときには，文盲層も小卒層より高い収入を得ることができる。地方大都市，中都市，地方町の中心地区では文盲層が小卒層より高い収入を得ることもできる。新興工業都市メルシンでは，流入者が多くて中心地区でも郊外地区でも居住地ごとに職業があまり変わらないとすれば，メルシンの郊外地区で文盲層が小卒層より高い収入を得られると想定することができる。

〔注〕

(1) State Institute of Statististics, *Census of Population, Social and Economic Characteristics of Population,* 1985, Table－71.

(2) 加納弘勝「アンカラのスラム」（『アジア経済』25巻4号，1984年4月），48ページ。また一部を書き加えた「アンカラのスラム――恒常的危機と民衆の社会不満」（新津晃一編『現代アジアのスラム』明石書店，1989年），309ページ。

(3) State Planning Organization, *Turkey, Main Economic Indicators,* July, 1989, p. 80.